それだけ平易に要を盡したものといはねばならぬ。

最後にいふべきことは師は決して單なる一學究の徒ではなかつた。御文一帖目第十五通講義を見ても、「上來文々句々ノ辯ハサラナリ、一宗ノ緊要タル御安心ノコトサヘモ略シテ通リタレドモ、御宗名ノ義ハ繁キヲ厭ハズシテソノ慷慨悲憤ノ哀情ヲ繰カヘシ〳〵述ベタルナリ」といはれてゐる如く、內心に燃ゆるが如き熱情が包まれてゐたのである。師が藩主に乞ふて自ら一向宗の名を改め、自後藩內に於て淨土眞宗の名を行はしめし事蹟とあはせ見て、滿腔の熱情は逆つて實行となつて現はれたのである。表面極めて冷かなるが如き語學音韻學の研究も、師に於ては既に出發の動機が單なる學問のための學問でなかつたことは前に述べた如くである。師の胸臆には絕えず宗學傳燈者としての血潮が流れてゐたのである。師の宗學は、宗內のみに通用するが如き狹い學ではなかつた。その科學的研究の精神は終にわが語學界の一大權威となるまで徹底したのである。一大谷派の義門ではなく、日本の義門となつたのである。然しわが大谷大學としては、單に語學者としての義門ではなく、吾々の先哲として、眞宗聖敎の解釋に畢生の力を献げた義門として永久に忘れてはならぬのである。その科學的精神は大にしては明治時代の先驅として、小にしてはわが大學の精神として永遠に傳へねばならぬのである。

編輯日誌

橋川正

無盡燈の後身として發刊すべき研究雜誌は最初『眞宗學報』といふ題名であつた。四月に創刊號を出すといふので、甚だ突嗟の思ひつきであるが、東條義門師に關して特に二三十頁を献げたいと思つたので早速その準備にとりかゝつた。時は既に二月の初旬であ

る。時が切迫してゐるので、内心大いに危ぶみつゝ兎に角その欄を擔當する任に當つた。自分が發議したのであるから、致し方がない、あらん限り盡力して見る覺悟である。直ちに平素義門の研究に潛心せらるゝ方々へ、寄稿御依頼をした。

二月十四日、大阪の秋渚磯野惟秋氏から御返翰が來た。「先年北區大火之節燼災致し爲に國語に關する資料一切丙丁に附し去り候まゝ是より斷然と國語研究を廢し、誠に思を致し居候義門の著書等にも遠ざかり已に十餘年にも相成候まゝ、只今は何も認め可申事無之候」といふ御斷りであつた。

二月十七日、堺の大鳥仲太郎氏から執筆する旨の御返翰を得た。次いで京大國史研究室の岩橋小彌太氏に御依頼し、吉澤博士にも御願ひして貰つた、鈴鹿三七氏も何か認めやうとのことであつたので、何卒よろしくと夫々御頼みした。又國語學の方面ばかりでは片手落であるから、宗學方面のことにつき住田・山田兩師の中、何方かに執筆して戴くやう御頼みした。

僕は義門に關して別に深い研究を積んだ譯でないから、最初からたゞ編輯の任に當るだけのつもりであつたが、傍ら義門の傳記や著書について、これまで發表されたものを漁つて見た。これによつて義門の學風、義門の性格はほゞ窺ふことが出來た。然し、義門ばかりに專注することは、到底事情が許さぬので、遲々として渉獵して居る間に、時日は遠慮なく過ぎてゆく。義門に結緣した幸ひに、一度、義門の墓に參詣し、義門のお寺を訪れてその遺著遺墨に接しようと思ひ、南條先生に紹介狀を出して戴いた。僕からも參院する旨の書信を發し、二月二十七日、急遽小濱訪問の旅途に上つた。

同夜は敦賀で一泊し、翌二十八日晝過ぎ、小濱驛に下車し直ちに義門のお寺なる妙玄寺に急いだ。見返れば國境の山々は白い雪帽子を頂いて居る、北國の冬空は身にしむほど寒さうである。寺に入れば、住職東條敦奉氏は僕を迎へて奥の一間に案内して下さつた。その室には逢傳師の詩、南條先生の扁額、同じく逢傳師の詩に和韻せられた軸が掛けてあつた。初めて訪れた處であるけれども、何となく親しみを覺ゑて、暫時休憩する間に、義門師の遺著や傳記史料などが推く机の上にもち出された。師の獲麟の筆となつた琵琶の詞の軸や、短册帖など次から次に出された。先づそれらはゆつくり見せて貰ふことにして、本堂に參詣し、餘間に安置してある義門靈傳師の法名を拜し、東條氏の案内で本堂裏のお墓に詣した。極小さいその墓石――三尺にも足らぬその墓石の表には「釋靈傳義門法師墓」といふ八字が刻んである。再び奥の一間に閉ぢこもつて、一々書物を繰りひろげて抄錄などもした。その間に風呂がわいたとのことで、溫い親切を心に感謝して一沐し、

今夜はお寺で御厄介になることにきめた。

夕飯の後、町長松見半十郎氏を訪れて見た。氏は『義門法師』の著者で、今日まで義門の紹介に餘程盡力された方である。快く會談して下さつて、突然のことであつたが手元にある短册なども見せて下さつた。今より十年前、上田萬年博士が初めて小濱町に來られ、車夫に義門の寺迄と命ぜられても、誰も知らなかつたといふが、今では小濱の町の人にして、恐らく義門の名を知らぬ者は誰もなからう。松見氏の談によると先年小濱町で義門師の七十年祭を行ひ展覽會などを開催して以來、地方の人はじめて義門の存在を知つたとのことである。義門遷化してより七十六年、昨秋贈正　位のことがあつて以來頓に義門の名は擧ることゝなつたのである。亡き人の面影を偲びながら、人通りの少ない小濱の町を歸つた。寒月は雲間を洩れて弱い光をなげ、妙玄寺の前を流るゝ南川の水面は、靜かに澄んで居る。埠頭の紅い燈が二つ三つ鮮かに輝いて居る。寺に歸つて繪葉書に通信を認め、今夜は靜かに眠りに就くことが出來た。

翌くれば二十九日、朝來天候險惡で、屢々風雨の襲來がある、霙が來る、霰が來る大變なことである。義門師のことについて、こゝで知られることだけ皆調べたので、町内先づ妙光寺に赴いて古い聖德太子の木像を見せて貰つた。もと比叡山南谷にあつた太子だとのことで、寺の沿革も比較的古くより知られ、文書としては足利尊氏の觀應二年三月の禁制文が最も古い。文書をゆつくり見る暇はないので、蒼黃寺門を辭し、引き返して舊城址に行つた。風雨甚だ急で、肩をすぼめて小濱橋と大手橋とを渡つた。特にこゝへ來たのは蓮如上人が吉崎から船で逃れて、この町の郊外西津の濱に上陸されたといふことを聞いてゐたので、せめてその地形なりとも見て行きたい思つたからである。八年程以前に一度汽船でこの港に入つたこともあるが、記憶に餘り殘つてゐないから、その海の青波が見たかつたからである。城址の石垣の上に身を寄せて、二三枚撮影した。本誌本號に掲載するものはその一つである。急いで妙玄寺に歸ると偶然鈴鹿三七氏に邂逅した。不思議な處で思ひがけぬ人にあつて、種々話をしたかつたが、汽車の時間が迫つてゐるので、俥で驛に馳けつけた。古綿をちぎつたやうな風雲は、後から後から現はれて中々絶ねさうにもない。折角こゝへ來たのであるから、短い時間に出來るだけ見て行かうと思ひ、新平野驛で下車して若狹國分寺址を一見し、十二時の汽車で福井に向つた。福井に着いたのはもう日沒の後であつた。詮方なく、旅舍に投じて十二時まで原稿を認めた。

翌三月一日、朝の間に東本願寺の別院に一寸行き、縣廳に引きかへして牧野信之助氏を訪れた。氏に依頼しておいた同じ縣史編

一七五

一七六

纂掛の高島正氏がまだお見ゐにならぬので、待つ間縣史の方で蒐集された種々の史料や文書を見せて貰つた。昨日見たいと思つて見なかつた妙光寺文書もこゝで見る事が出來た、その他眞宗關係の寺院の史料を特に見せて貰つた。晝飯の後、間もなく高島氏も來られ、義門のことにつき高説を傾聽した。氏は熱心に、長い間の研究を吐露され、大いに稗益を蒙つた。夕景晩餐を頂きながら、高島氏牧野氏、それに上田三平氏も交つて下さつてうちくつろいたお話を承つた。思はぬ配慮を受けて、名殘を福井に留めつゝ午後八時すぎ出發し、午前三時すぎ京都驛に歸着した。僅か二三日の旅行であつたけれども、この旅行によつて得る處は決して少くなかつた。殊に義門師を中心として、到る處に於て義門師に關する談話を聞き、史料を見、實に目に觸るゝところ耳に聞くところ、その中心は必ず義門であつた。これほど愉快な旅行は今まであまり經驗したことがなかつた。

三月三日、岩橋氏より通信があつて、御令閨と子達とが惡いので御執筆不可能といふ御ことはり狀であつた。鈴鹿三七氏もむつかしさうな樣子である。

三月五日、夜、西六條に舟橋水哉師を訪れ、普門律師のことを尋ねた。普門は義門に俱舍論と梵曆天文を敎へた人である。俱舍研究者として普門は餘り知られて居らぬらしい樣子であつた。普門(無外子)の須彌山儀圖一枚を見せて貰つて、引き退つた。普門、名は圓通、號は無外子である。今の熊野神社の境内にあつた積善院(聖護院屬)に住んでゐた。佛國曆象編、須彌山儀圖、和解、實驗須彌記、須彌略曆書、梵曆筮進等の著者で、天保五年壽八十一で遷化した。義門が傍ら梵曆の研究者であつたことは傳記に見ゐるところであるが、妙玄寺に現藏する須彌山儀の分銅に「須彌山儀考、聖護院親王之侍講普門阿闍梨」といふ銘のあるから見て、義門が京都へ來て普門に就いて梵曆を學んだことは明かである。師の四方の歌の如きも亦、この梵曆に關係せしめて解することが出來るであらう。

三月十一日、高島正氏より送稿があつた。翌十二日には吉澤博士より、十三日には住田先生より夫々原稿を頂戴した。大島仲太郎氏の原稿は未着なので、催促狀を出し十四日中にと願つた。今日になつても未だ來ない。印刷所の都合もあるので今日中に渡さねばならぬ、到着すれば追ひ組することゝして兎に角編輯を終つて印刷所に廻すことにした。

いひ落したが十三日午前市内眞敬寺(同窓大淵眞了君のお寺くを訪れて義門の書簡二通を得た。眞敬寺湛靜は妙玄寺から出た人であつて、義門は上洛するといつも眞敬寺に泊つたのである。そのことは紬滯廼日記にも見ゐて居るところである。過日、既に高島

氏がこゝに來られて二通の書簡を借りて行かれた後であるが、兎に角義門の筆蹟と認めるものが又二通得た。一は四月廿九日附、一は七月廿六日附である。これらの書簡をまとめて義門書簡集を編み、又義門歌集などにも手がつけたいことである。本欄の終に義門の著書一覽と年譜を附けやうと思つたが、何れ遠からず高島氏の義門傳が發表せられ、それに詳細に出ることであるから、俄作りの杜撰なものを出すよりはと思つて控へることにした。終に御繁忙中にも拘らず、わが申し出を諒せられ執筆して下さつた方々に對して篤く感謝する次第である。何分今回の計畫には時日が無かつたため手落の點が甚だ多いことであらうが、惡しからず御詫を申し上る。義門に關する研究は今回限りで終る譯でないから、今後益々義門のことについて御氣づきのことがあるならば、御遠慮なく投稿あらんことを望むのであつて、本誌又そのためには十分の領解を相續するつもりである。

（三月十五日記）

義門の書簡より

……其外はませばりになりとも何になりともし玉へ、しかしあげつゝ申はいかゞなれども、私のかけるに少し勝れたる位の平々の中へはませ玉ふまじきは、開轍院師大平なり、其外も餘り狂歌や發句の中へなはりませ玉ひて、ゆめ萬縷後便にと日くれに蚊をはらひつゝ先閣筆

七月廿六日黄昏（京都眞敬寺宛の禮狀、同寺藏）